

## 日本伝統文化振興財団について

専務理事 大野寿子

### <概要>

#### ●財団とは

- ・1993年ビクターエンタテインメントを設立基金元として、日本の伝統文化・民俗芸能の調査・記録・保存・公開を目指す、「ビクター伝統文化振興財団」として設立。
- ・2005年7月 さらに、伝統を未来に生かす『音源アーカイブ』設立と教育・芸術ジャンルへのレコードメーカーの枠を超えた取組みを行うことを目的として、「日本伝統文化振興財団」に名称変更。
- ・2011年6月内閣府の認定を受け、「公益財団法人日本伝統文化振興財団」として新たなスタートを切る。
- ・2018年の今年、創立25周年を迎える。

#### ●当財団の主たる事業は

- ① 「無形文化に関する調査並びに資料の収集・記録・保存及び展示」
  - ② 「無形文化に関する出版物並びにディスク及びビデオ等の発行」
- つまり、記録・保存・公開、を通じて無形文化の普及・振興を図る。

- ・設立基金元ビクターエンタテインメントの原盤を含め、全約1800タイトルの伝統音楽・伝統芸能を中心としたCD・DVDを廃盤にせず、「必要とされるときにいつでも手に入れることができる状態」に置いている。

詳細は財団のHP、作品検索をご一覧いただきたい。

レコードメーカーは民間企業であり、時代に適合したヒット曲を追いかけるのが常であり、売れないジャンルのCD・DVDは廃盤にしてしまうため、欲しいと思うときには手に入らないという現状におかれている。

#### ●具体例

##### <無形文化の記録・保存の取り組み>

- ・SP盤の約5万音源のデジタルアーカイブ、成果は国会図書館の「れきおん」に見られる通り。アクセス数は年ごとに増加傾向にある。しかし、これで全部ではなく、約5万音源が手つかずのままである。
- ・企業・団体からの依頼、例えば大蔵精神文化研究所、日生劇場等からの、過去の歴史的記録をアーカイブしたいという要望に応じる。
- ・一方、アーティストの遺品の中から秘蔵音源を公開することも。例えば、第二の宮城道雄と称賛された衛藤公雄氏、二期会創立メンバーの柴田睦陸氏、中山悌一氏のご遺族からの要望で、貴重な音源を世に出し高い評価を得ている。
- ・国立劇場等で行われる、各会派、アーティストからの演奏会の記録の依頼も多い。

・紀尾井ホールとの協働事業

紀尾井ホール（公益財団法人新日鉄 住金（すみきん）文化財団）が小ホールで主催する公演（伝統芸能）の映像記録を 2005 年から約 15 年にわたり、映像撮影で保存。（年間主催公演数約 12 回×15＝約 180）

・財団で発売した作品約 2000 タイトルは、基本的に、現行発売中で、いつでも手に入れることができると言ったが、

↓

<高品質・クオリティの高さにも注目>

- ・文化庁芸術祭における受賞作品は、全 11 作品、うち大賞受賞作品は 3 作品、優秀賞 8 作品。

大賞受賞作品：

- ① 常磐津一巴太夫による常磐津の大曲「三世相錦繡文章（さんぜそう・にしき・ぶんしょう）」の全段通しのもの。
  - ② SP 音源による復刻盤「信時潔作品集」CD6 枚組  
主に昭和戦前期に録音された SP 音源より復刻 CD 化。交声曲「海道東征」をはじめ、歌曲、合唱曲、戦時下から戦後の作品まで、信時作品の全貌をたどる作品集。
  - ③ 京都明暗寺に伝承される明暗対山派全 39 曲を伝承する酒井松道が新録したもの。
- ・他社のレコードメーカー（ビクターが主になるが）が廃盤にしてしまった、芸祭受賞作品を復刻発売し、貴重な資料として提供し続けている。

<無形文化の普及・振興への取り組み>

●伝統文化に関する団体等に対する顕彰・継承者の育成・支援

- ・日本伝統文化振興財団賞の顕彰＝1996(平 8)年から現在 21 名を顕彰  
伝統芸能分野で将来いっそうの活躍が期待される優秀なアーティストを 1 名を顕彰し、継承者の育成と支援を行っている。  
今年、箏曲地歌・平家（平曲）の若手演奏者・菊中央雄司さんが受賞した。これまでの受賞者は現在、もはやベテランから中堅の域で重要なポジションで活躍する人々ばかりで、賞としての重みが増しているような自信を感じている。
- ・中島勝祐創作賞の顕彰＝2011(平 23)年から現在まで優秀作品 6 作品を顕彰  
長唄三味線演奏家・作曲家として舞踊曲など多数作曲され我が国の創作邦楽の発展に寄与した東音中島勝祐師の功績を記念して創設した。  
若手という意味では、邦楽の囃子方だけが流派を超えた 9 名で結成した「若獅子会」の作品もみごとで、皆さんにも興味を持っていただきたいもののひとつ。
- ・邦楽教育支援事業（校教育現場への支援）  
楽器（ネオ箏・三味線）の貸出＝年間約 20~30 件  
学習指導要領の変遷に伴い、和楽器の演奏を「聴く」から「触る」、「演奏

する」「唄う」へ。コミック『この音とまれ』高校箏曲部の青春物語の人気度、その架空の箏曲部演奏による CD が（発売元：キングレコード）今年度の芸祭レコード部門優秀賞を獲得。通常であれば、アーティストが誰か、で売り出すところを、アニメの登場人物になり替わった演奏者が、役になり切って演奏する CD という興味深い内容。邦楽展開の新しい手法かもしれない。

わずかずつだが、こういう所にも教育の成果によって底辺が広がっていることを感じている。

#### ・主な主催公演の概要

① 間もなく、3月11日を迎えるが、2011年、例年行っている財団賞の贈呈式と披露演奏を急きょ変更し、2011(平23)年5月31日贈呈式のあとに、歴代の財団賞受賞者15名が全員参加しての「東日本大震災チャリティ公演—古典芸能の夕べ」を開催した。急な我々の呼びかけにもかかわらず、全員が参加、そして「何か自分たちにできることはないか、と誰もが模索していた」というコメントがたくさん寄せられた。結果、義援金を送金させていただいた。

② 2012(平24)年7月11日から27日 第1回東京無形文化祭開催。

アリオン音楽財団が行っていた、「東京の夏音楽祭」を踏襲したような形式で、ワールドミュージック、伝統芸能、民俗芸能の多岐に亘り、我々ならではの、というスペシャル・プログラムを組んで実施した。

ハイチのカーニバル音楽、パキスタンの歌姫サナム・マールヴィー スーフィー・ソングを歌う、韓国珍島の詩と祝祭、祈る一宮古島の神歌と古謡、弔う一じゃんがら念仏踊り、囃す一囃子の競演、躍る一舞の競演、語る一節の競演

一般に、歌舞伎は歌舞伎座で、能は能楽堂で、という縦割りの公演が多い中で、ジャンルを超えて「囃す」⇒江戸里神楽、民謡囃子、邦楽囃子、能楽囃子、「躍る」⇒三番叟、石橋（宝生シテ方の舞）、舞楽、「語る」⇒（説教節、浪花節、女流義太夫）というテーマで、実施したことは斬新であった。

③ その他に、単独公演で、鬼太鼓座公演、など。

④ 例年7月10日、11日開催。第58回ビクター名流小唄まつり（三越劇場、2日間）開催。

小唄界の各流派の会主から一門までが集う演奏会で、三越劇場での2日間は華やかで、賑やかな賑わいを見せている。

#### ・演奏会の後援

年間約100公演を後援(邦楽ジャーナル誌、財団HP、Twitter等の告知、)

＜こうした事業の推進に当たって大きな障壁となる二つの問題点＞

(1) 「伝統文化の継承」に関する問題点

文部科学省の音楽教育指導要領改訂によって、教育現場での伝統音楽指導が平成14年によく開始された。しかし、明治期以来、百年を超えて続けられてきた西洋音楽の著しい偏重と、伝統音楽・民俗芸能をないがしろにしてきた音楽教育の影響は甚大で、その結果は多方面にわたって表出している。

最も顕著な例として

- ① 伝統音楽・芸能全般における継承者の大幅な減少である。その背景には、若い世代が安心して伝統音楽に生涯の仕事として取り組み、将来の担い手となっていく環境が乏しい現状もある。
- ② 伝統音楽・民俗芸能は日本文化の重要な原点のひとつであるにも関わらず、新聞・放送等マスコミの関心は非常に低く、その結果、国民が自国の伝統音楽・民俗芸能を知る機会には実際には非常に少ないのが現状である。

東日本大震災によって、東北地方の多くの民俗芸能伝承の担い手と伝承の現場である施設や装束・道具等が被災し、古から伝えられた貴重な伝承の復興が遅々として進まない中、より広い視点から、日本文化の原点を形成する伝統音楽・民俗芸能の継承に、本法人がいかに寄与していくかが問われている。

デジタル音源アーカイブ

## (2) 記録・保存・発行に関する問題点

先程もふれたように、(平成20年からSPレコードに残された大正期からの貴重な記録音源の復刻に、一般社団法人日本レコード協会・日本放送協会・公益社団法人日本芸能実演家団体協議会・一般社団法人日本音楽著作権協会と共に取り組み、国立国会図書館でのデジタル音源アーカイブと国立国会図書館における公開事業) れきおんは公開され、アクセス数も増加しているが、デジタル音源アーカイブ事業は5年前に終了となった。

しかしここで終了したのは、いわゆるレコードメーカー系のアーカイブであり、既になくなった小規模なメーカーのSP盤残り約5万音源のアーカイブが手つかずのままの状態である。

また、平成5年の創立から現在までに刊行したCDアルバム・カセット・ビデオ等は、1800タイトルを超える。しかし、インターネット時代を背景に、いわゆるパッケージ商品としての音楽・映像作品の流通は大きな転換期を迎え、レコード産業の売上規模は全盛時の四分の一以下にまで低下している。

間違いなく、音楽のメディア環境は大きく変化し、ダウンロードの世界に移行していくのは、もはや時間の問題と思われる。我々もその方向に向かって、少しずつ動き出している。

このような環境にあって、需要が極めて少なくなっている伝統音楽ソフトにおいて、今後も「何時でも何処でも手に入ること」の実現を目指し、少数のニーズに常に応えるために努力していきたいと思う。

<伝統文化の認識を新たにしてほしい、興味を持ってほしい>

- ・昨年、某著名指揮者は、このように語っている。茶道、華道、書道、俳句や日舞、能や「歌舞音曲」と軽く呼ばれる日本の伝統芸術は、現代人には本当に必要なのだろうか?」。話の趣旨は、文化庁予算はクラシックにも予算を出してほしいということのようである。文化予算の取り合いという低レベルの問題意識では何事も解決しないではないか、と思う。
- ・この発言は、伝統芸能や民俗芸能の置かれている現実を知らない、暴言としか言いようのない内容である。しかし、多くの人々が陥りやすいポイントでもあると思う。
- ・本当に優れた芸の世界に触れてほしい。生き生きとして、迫力のある舞台を観て、聴いて、感じ取ってほしい、そんなことを思いながら、これまで述べてきた様々な活動を、ひき続き効率的な方法を模索しながら発信していくつもりである。スポーツだけでなく文化の祭典でもある 2020 年の東京オリンピックに向けて新たに展望しつつ、存在基盤の強化を図りたいと考えている。

最後に、とても興味深いお知らせをひとつ。

伝統音楽の生きのいい、今、旬の、本当の本物を見ていただき、その真価を問いたい、という思いから、創立 25 周年記念公演として、様々な伝統芸能ジャンルの第一線でご活躍を続けている、財団賞歴代受賞者の出演による記念事業を開催する。

「熟練の技量とひととき優れた芸術性により、現代の日本における伝統芸能の真の素晴らしさを多くの方々にお届けしたいことを願って」

日本伝統文化振興財団設立 25 周年記念公演

日本伝統文化振興財団賞歴代受賞者による古典芸能の夕べ

## 伝統芸能の現在と未来 ～古典継承の最前線を聴く～

主 催 公益財団法人日本伝統文化振興財団  
後 援 新日鉄住金文化財団 (予定)  
ポーラ伝統文化振興財団 (予定)

開催日 2018 年 11 月 6 日 (火)  
開催時刻 午後 6 時～午後 9 時 (予定)  
会 場 紀尾井ホール (1 階)